

英語発音をめぐる教育環境

—入門期の発音指導の現状—

山本久仁子

はじめに

1998年7月の教育課程審議会答申を受けて2002年から始まる学校完全5日制に伴う学習指導要領（小学校、中学校）が、1998年12月15日に発表された。この学習指導要領は2000年より移行措置に入り、2002年より完全実施される予定で、現在、この指導要領にあわせた教科書の編纂が進んでいる。今回の指導要領の改訂のねらいは「ゆとり」「特色ある教育」というキーワードに表れているように、週休完全2日により年間授業時数が、現行より週当たり2単位時間削減されている。また「総合的な学習の時間」を創設し各学校が創意工夫を生かした教育活動を展開できるようにというねらいもある。豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成するために、中学校の外国語が必修となり英語を履修することが原則として全員に義務づけられ、「聞くこと」「話すこと」の教育が一層重視されている。

本論では2002年の新指導要領の中でも特に発音指導に着目し、中学校教科書の中での発音指導に関する記述を調査、分析することを目的とする。1章では入門期における発音指導について中学校検定教科書を使い調査する。2章では発音指導の中でも特にSuprasegmental Phoneme（超分節音素、かぶせ音素）について焦点を当て論ずる。先行研究として、ガーナーズとボンドの「韻律の鑄型」を参考にする。

ガーナーズとボンドによれば、「話を聞く者はその強勢と抑揚に注意して聞こえてくる話を処理し、関知して理解するための「韻律の鑄型」、または相手の発話に

適合する音声パターンを自分の内部に造り上げる。強勢の置かれた母音に注意し、途切れない流れのように聞こえてくる発話を強勢された母音と隣接する子音に対応した意味のある言葉に変換していく。」と述べている。(1)

1章 中学校教科書における発音指導の比較

2002年より移行措置に入る新学習指導要領では外国語の目標を「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。」(2)としている。現行の指導要領の目標「外国語を理解し、外国語で表現する能力を養い、外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるとともに、言語や文化に対する関心を高め、国際理解の基礎を培う」(3)と比較すると外国語そのものの能力よりも、外国語を使っての言語や文化に対する理解を求めており、「聞くこと」「話すこと」という言葉が目標の中に初めて入ってきた。また、現行の指導要領では学年別に設定されていた目標、内容が学年枠を取り除き一つにまとめられたこと、言語活動の取り扱いにおいて言語の使用場面や言語のはたらきを具体的に表していることが特徴としてあげられる。以下は、学習指導要領の「言語活動の取り扱い」の項を抜粋したものである。

(2) 言語活動の取扱い

言語活動を行うに当たり、主として次に示すような言語の使用場面や言語のはたらきを取り上げるようにすること。

〔言語の使用場面の例〕

a 特有の表現がよく使われる場面

- ・あいさつ・自己紹介・電話での応答・買い物・道案内・旅行・食事 など

b 生徒の身近な暮らしにかかわる場面

- ・家庭での生活・学校での学習や活動・地域の行事 など

〔言語のはたらきの例〕

a 考えを深めたり情報を伝えたりするもの

- ・意見を言う・説明する・報告する・発表する・描写する など
- b 相手の行動をうながしたり自分の意志を示したりするもの
 - ・質問する・依頼する・招待する・申し出る・確認する・約束する・賛成する／反対する・承諾する／断る など
- c 気持ちを伝えるもの
 - ・礼を言う・苦情を言う・ほめる・あやまるなど (4)

この章では、入門期に当たる中学校1年生の教科書の中で発音指導がどのように扱われているかを調査する。使用教科書は検定教科書7社の中から、東京書籍のNew Horizon English Course, 秀文出版のTotal English, 教育出版のOne World English Courseとした。文中NHは東京書籍のNew Horizon English Course, Toは秀文出版のTotal English, OWは教育出版のOne World English Courseを表すものとし、それぞれの教科書のBook1（中学校1年生用）を調査対象とし、必要に応じてBook2、Book3についても言及する。教科書の出版年度はすべて1997年度版（現在使用されているもの）とする。

1.1 東京書籍 New Horizon

1.1.1 NHの特徴

NHは、1998年度の発行実績が、200万部、日本を代表する教科書の一つである。編集者の1人、高本（1998）は、以下のようにNHを紹介している。

Thus, we set a format, as in the following diagram to integrate three major goals---performance, grammar, and reading--- in each unit of the textbook:

grammar---listening---speaking---reading
---writing---pre-lesson---lesson---review

And it is in the listening, speaking, and review parts of each unit where we have introduced the "beat drills" and "sound boxes" to better students' aural-oral skills. We also added some elements of "sound play," such as tongue twisters or songs to make these drills amusing to the students at a threshold level (5)

1.1.2 Sound Box

NHでは、発音指導を各ユニットごとにSound Box（以下SB）という項目でまとめている。教科書準拠のテープやCDを使うとナーレーションや音楽に合わせて注意すべき発音を学習できるように編集されている。Book 1は11のユニットから構成されており、SBは以下のような項目を扱っている。（ユニット11にはSBがない）。

- S B 1 リズム 日本語と英語のリズムの違い
母音 [i:]と[u:], [i]と[u]
- S B 2 リズム 疑問文と答えの文の音調（be動詞の疑問文）
母音 [ʌ] [æ]
子音 [θ] [ð]
- S B 3 リズム 疑問文と答えの文の音調（一般動詞）
アクセント Canada---Canadianなど
- S B 4 リズム 疑問詞を使った疑問文の音調
母音 [aɪ] [aʊ]
子音 [f] [v]
- S B 5 リズム orの音調
母音 [eɪ] [e], [ou] [o:]
- S B 6 アクセント 外来語と英単語のアクセントの比較
母音 [ɑ] [æ]
子音 語頭、語末の子音及び子音群
- S B 7 音のつながり リエゾン
子音 [sɪ] [zɪ]
- S B 8 子音 [r] [l]
- S B 9 母音 まとめ (1)
- S B 10 母音 まとめ (2)

リズム、アクセント、母音、子音、リエゾンともにユニットの本文で使った表現や語が多く使われており、授業の中で扱いやすいように工夫されている。

1.2. 秀文出版 Total English

1.2.1. Toの特徴

Toは比較的新しい教科書で、1998年の発行部数は、各学年10万部である。1997年度版の内容見本の中にある、編集の基本方針を以下に示す。

- 1、コミュニケーション能力の育成
- 2、国際交流の時代に相応した題材
- 3、学習者の自発的、創造的能力を尊重 (6)

1.2.2 Final Stepについて

Toではレッスンごとに設けられたFinal Step (以下FS) をまとめの活動と位置づけ、その中にリスニング・プラクティスという聞き取りの練習をする項目を設け、文章中に生じる音変化やリズム、イントネーションに焦点を絞り、音声について系統立てて練習ができる様になっている。特に、弱形、連結、同化、脱落等の音変化に注意をさせ、「聞く」能力を身につけさせ発音練習もできる。(7)

Book1は12のLessonで構成されており、それぞれのLessonにFSがあり、教科書準拠のテープやCDを使い、音声の指導ができるようになっている。以下に指導項目を記す。(Lesson4, 9, 10には音声指導の項目はない。)

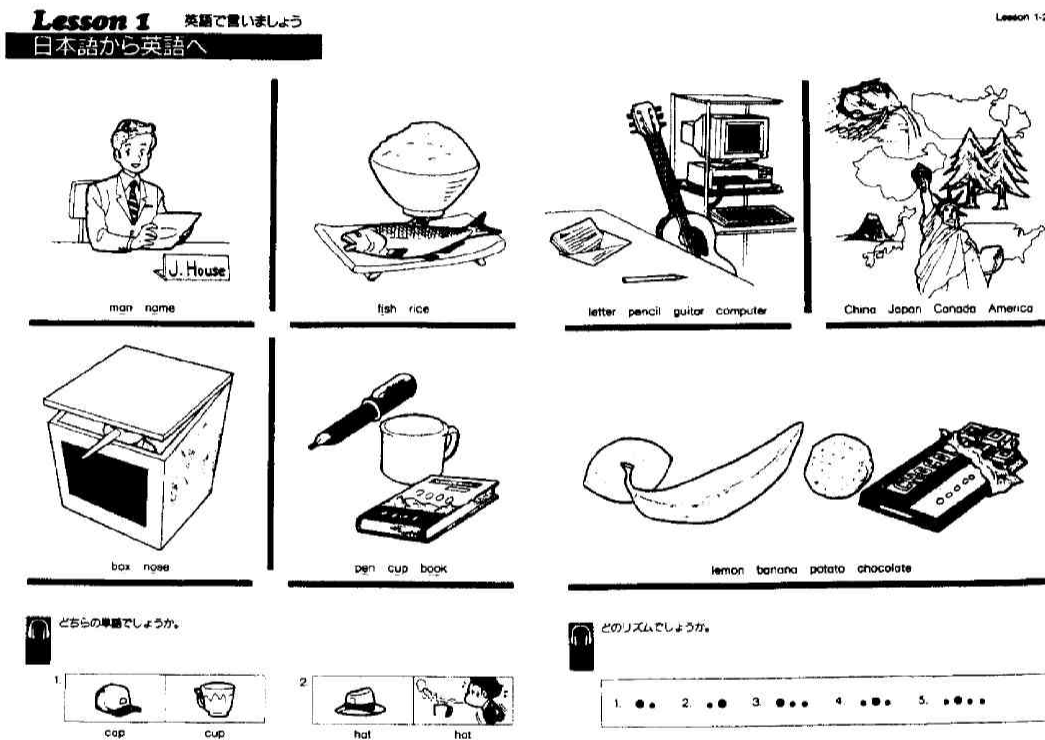
- F S 1 子音 [s] [f] [v]
音調 聞き取り
- F S 2 リエゾン
- F S 3 リエゾン
- F S 5 文の強勢 SVCの文
- F S 6 文の強勢 命令文、疑問詞を使った疑問文
- F S 7 音調 いろいろな疑問文
- F S 9 文の強勢
- F S 11 子音 [t] [d] [id]の聞き取り
- F S 12 リエゾン

FSでは、教科書準拠のテープと連動して、聞き取りの練習を毎回入れている。

1.3 One World English Course

1.3.1 OWの特徴

OWは発行部数30万部で、編集の基本方針では、英語を楽しく学べる教科書、英語が使える教科書、世界が見える教科書の3本柱を打ち出している。Book1のLesson1は、導入として英語の音になれることを重点的に、日本語と英語の音の違いを意識させる構成である。(資料1)



資料1. One World English Course Book1 P6-7

著者の1人である佐々木 (1997) は、平成9年版についてつぎのように紹介している。「まず相互の意思伝達としての英語の習得が出来ることを考えました。そのため、聞いたり、話したり、読んだり、書いたりする言語活動が十分行えるようにしながら、出来るだけ音声を重視するようにしました」。(傍線、筆者) (8) もう1人の著者、松本 (1995) も、入門期のリスニング指導について、本文を利用しながらの練習を推奨しており、「自分でいって見たことがない音は聞き取りにくい」という発想で、聞き取りのための発音練習を徹底的に行うことを提案している。(9)

また、文部省が示す、観点の趣旨、参考資料に元づいた「言語活動観点別評価

資料2. One World 「言語活動観点別評価基準例」

[1年] LESSON 1

指導内容	題材	「英語で言いましょう」 1. アルファベット（身近にあるアルファベット） 2. 日本語から英語へ（カタカナ英語と英語の音声の違い）
	言語材料	〈主な意味・機能〉 1. アルファベットと身近にあるアルファベットの意味 2. カタカナ英語と英語の発音の違い 3. アルファベットの綴りと発音との基本的な関係
観 点 別 評 価 基 準	関心・意欲・態度	〈聞くこと〉 ・初めて聞く英語の音をしっかりと聞き取ろうとする。 〈話すこと〉 ・アルファベットや英単語をはっきり発音しようとする。 〈読むこと〉 ・アルファベットや英単語を正しく読もうとする。 〈書くこと〉 ・アルファベットや英単語を正しく書き写そうとする。
	L	〈音声〉 アルファベットと次の単語の発音を正しく聞き取ることができる。 man, neme, fish, rice, box, nose, pen, cup, book, letter, pencil, guitar, computer, China, Japan, Canada, America, lemon, banana, potato, chocolate, cap, hat, hot 〈理解〉 アルファベットと単語を聞いて表しているものがわかる。
	S	〈音声〉 正しい発音や強勢、適切な音量で発表できる。（上記L欄〈音声〉参照） 〈表現〉 自分が示したいアルファベットや単語が言える。
	R	〈音声〉 正しい発音や強勢適切な音量で読むことができる。 〈理解〉 アルファベットや単語を理解できる。
	W	〈文字〉 1. アルファベットや単語の書き方の基本的な規則を学ぶ。 2. アルファベットや単語を、規則にしたがって正しく模写できる。
	知識・理解	1. 英語はアルファベットで表記されることを知る。 2. 英語の基本的な発音の仕方を知る。 3. カタカナ英語と英語の音声の違いを知る。

(注) L : Listening S : Speaking R : Reading W : Writing

基準年齢」を示しており各レッスンごとにある、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの観点別評価基準には、それぞれ「音声」の項目が示されている。(p177 資料2)

1.3.2 Let's Review について

OWでは、数課ごとに見開きページのLet's Review (以下LR)を設け、音声に関するまとめとフォニックスを扱っている。Book1は13のLessonと5つのLRからなっている。また、Lesson3以降では、見開き1ページごとに、欄外で本文中に出てくる文を例に取り音調を示している。LRの音声に関する指導項目を以下に挙げる。

LR1	語のアクセント、文の強勢	
	フォニックス	母音 a:[æ], [ei], i:[i], [ei], u:[ʌ], [ju:], e:[e], [i:], o:[ɑ], [ou]
LR2	フォニックス	二重母音 (アルファベット読み) a:[ei], i:[ai], u:[ju:], e:[i:], o:[ou], 子音 c:[k]
LR3	フォニックス	母音 ir:[ə:r], u:[ʌ], y:[ai], ay:[ei], a,al:[ɑ:], 子音 ch:[tʃ], se:[z]
LR4	フォニックス	母音 ar:[ɑ:r], or:[ɔ:r], ea:[i:], ea:[e], oo:[u], oo:[u:], ou:[au], ow:[au]
LR5	文の区切り	
	フォニックス	母音 ee[i:], 子音 th[θ], th[ð], ff[f], v[v], sh[ʃ], 黙字 gh, t, k

2章 超分節素 (Suprasegmental Phoneme)

について各教科書の比較

この章では 前項で調査し教科書3種類について発音の指導内容を項目別に分析してみる。若林、手島 (1997) 発音の指導内容として以下の4項目をあげている。

1. 個々の音〈母音〉（〈強母音〉と〈弱母音〉）と〈子音〉
2. 音の連続：単なる音の連続・音の脱落・〈同化〉など
3. 〈強勢〉・リズム
4. 〈イントネーション〉 (10)

また、畑中、久松（1996）は話すことの指導として基本的な技術的事柄を7項目挙げている。

1. 個々の音の正確な発音に慣れること。
2. 機能語の弱形に慣れる。
3. 内容語の弱音節
4. 同化作用
5. r-linking と n-linking
6. 無声化と有声化
7. Stress, rhythm, intonation (11)

2002年実施の新学習指導要領の言語材料の中では音声の指導について5項目を挙げている。

- (ア) 現代の標準的な発音
- (イ) 語と語の連結による音変化
- (ウ) 語、句、文における基本的な強勢
- (エ) 文における基本的なイントネーション
- (オ) 文における基本的な区切り

これを下の現行の学習指導要領（1988年改訂）での記述と比較すると、語、句、文のアクセント（強勢）が一つにまとめられ、語連結により音変化が新たな項目として加わった。

- (ア) 現代の標準的発音
- (イ) 語のアクセント
- (ウ) 文の基本的な音調
- (エ) 文における基本的な区切り

(オ) 文における基本的な強勢

いずれの研究でも、発音の指導内容として個々の音、つまり分節音素 (Segmental Phoneme) の他に、強勢 (アクセント)、音調 (イントネーション)、語連結 (リエゾン)、区切り (ポーズ) などの超文節音素 (Suprasegmental Phoneme) を重視している。従来、発音指導について述べるときに、個々の音に重きを置いた、分節音素についての論議が中心となっていたが、英語の音声を考えるときに超文節素の占める役割は決して小さいものではない。例えば、語強勢の位置を間違えると全く違った意味の語になってしまうこともあり、伝達という観点からは、個々の音を間違えるよりもアクセントを間違えた方が罪は重くなる。また、若林・手島は音の連続について「英語には、日本語にはない音の連続があり、指導の対象としなければならない」(12) と述べている。

この章では、前項で調査した3種類の教科書の発音に関する記述を学習指導要領の項目に沿って分析して、特に超文節音素について考察する。調査対象とした教科書は1988年改訂の学習指導要領によって書かれた物であるから、1988年改訂の学習指導要領による5項目について分析した。

それぞれの記述をまとめたものが下の表である。

	NH	To	OW
1, 発音	新出単語には記述なし。 巻末の単語集にはIPAで表示。	同左	同左
2, アクセント	新出単語には ` (アクセント記号) SBは第一強勢を太字で表示 (資料3)	同左	同左 LR1で重点的に指導
3, 音調	SBの中でリズムとして	FSの中の聞き取りとして	各ページ欄外に「」で
4, 区切り	Book3で扱う	記述なし	Book2で扱う
5, 文強勢	SBの中で (資料3)	黒丸の大小で ●●●	同左

表1 音声指導の教科書の記述

どの教科書でも個々の音 (Segmental Phoneme) についてはそれぞれの発音を重点的に扱ったセクション (Sound Box : NH, Final Step : To, Let's review : OW) の中で、母音・子音を系統だって指導できるように掲載している。

2.1 語強勢 (アクセント)

語強勢については、各教科書ともに従来通りにアクセント記号 (') を用いた表記が主流で、新出単語には全てアクセント記号が付記してある。Book2, 3で、新出単語に発音記号が併記されている場合には、発音記号にアクセント記号が付記されている。NHのSound Boxの中の記述には特徴があり、第一強勢のある音節全体を太字で示しており、視覚的にも学習しやすくなっている。(資料3)

同書では、外来語と日本語のアクセントの比較についても重点的に扱っている。

Sound Box

<p>リズム Yes, Noで答える疑問文は、 例えばタタタータターのように、上げ 調子で言うのが基本です。答えは、ター タターのように下げ調子で言います。</p> <p>Do you know this flag? タ タ ター タ ター</p> <p>Yes, I do. ター タター</p>	<p>Do you know this leaf? タ タ ター タ ター</p> <p>No, I don't. ター タター</p> <p>アクセント</p> <p>Canada—Canadian Japan—Japanese Brazil Portuguese</p>
--	---

P.31

Sound Box

<p>アクセント</p> <p>英語らしい正しい発音とアクセント</p> <table style="width: 100%;"> <tr> <td>ボタン</td> <td>button</td> </tr> <tr> <td>コンピュータ</td> <td>computer</td> </tr> <tr> <td>ロケット</td> <td>rocket</td> </tr> <tr> <td>ハンバーガー</td> <td>hamburger</td> </tr> </table>	ボタン	button	コンピュータ	computer	ロケット	rocket	ハンバーガー	hamburger	<p>母音</p> <p>[a]—口をたてに大きく開く [æ]—口をたてよこに大きく開く [a]—[æ] stop—cat rocket—rabbit</p> <p>子音</p> <p>あとに余分な音を入れないように注意</p> <table style="width: 100%;"> <tr> <td>from</td> <td>friend</td> <td>big</td> <td>milk</td> </tr> <tr> <td>stop</td> <td>meet</td> <td>next</td> <td>good</td> </tr> </table>	from	friend	big	milk	stop	meet	next	good
ボタン	button																
コンピュータ	computer																
ロケット	rocket																
ハンバーガー	hamburger																
from	friend	big	milk														
stop	meet	next	good														

P.54

資料3 New Horizon Book 1 より

2.2 音調 (イントネーション)

音調 (イントネーション) については、各社記述にばらつきがみられ、NHは Sound Box の中でリズムと言う項目で扱い (資料4)、一方Toでは3年間を通して音調に関する記述はFinal Step1の中で、聞き取りによる上がり調子、下がり調子を3例取り上げているだけである。(資料5)

Sound Box

<p>(リズム) Yes, No で答える疑問文は、例えばタターターノのように、上げ調子で言うのが基本です。答えは、ターターノのように下げ調子で言います。</p> <p>Is this a dog? Yes, it is. タターターノ タターターノ</p> <p>Is that your school? No, it's not. タター タターノ タターターノ</p>	<p>(母音)</p> <p>[ʌ] 一口をあまり開けない [æ] 一口をたてよこに大きく開く [ʌ] - [æ] bus - bath country - factory</p> <p>(子音)</p> <p>[θ] [ð] 軽く舌をかむ [θ] thank three [ð] this that</p>
---	--

資料4 New Horizon Book 1 P.25

Final Step



1. 1回目は下線部に注意して聞き、2回目はあとについて言ってみましょう。
1. baseball music 2. tennis Japanese 3. coffee love
2. 1回目は英文をよく聞いて、文の終わりが上がり調子ならば↗、下がり調子ならば↘を()に書きましょう。2回目はあとについて言ってみましょう。

1.



()

2.



()

3.



()

資料5 Total English Book 1 P.18

OWは各ページごとに代表的な文を2-3例取り上げて欄外で音調を示している。ほぼ全ページにわたり欄外に音調表記があり、生徒が自分で学習するときの手がかりにもなり、視覚的にも音声が変わりやすい。(資料6)

•1)) Are you from Australia? Yes, I am. / No, I'm not.
Nice to meet you. Nice to meet you, too.

P.17

•1)) I like rock, but I don't like classical music.

P.31

•1)) Let's have a party tomorrow.
When is your birthday? It's December 25.

P.71

資料6 One World English Course Book1

音調の指導では、1年生の初期に、This is ~ . (下降調) Is this ~? (上昇調) What is ~ ? (下降調) Is this A or B? (上昇、下降調) の指導がされ、英語の音調パターンの定型として、生徒も丸暗記をし、それ以降の段階で意識して指導することはあまりみられない。しかし、現実にはThis is your book? (上昇調) も、Is this a book? (下降調) も、What is this? (上昇調) も存在するし、音調によって意味が変わる文、I beg your pardon. (下降調)「どうもすみません」I beg you pardon? (上昇調)「もう一度おっしゃっていただけますか」などについても指導していく必要がある。

2.3 区切り (ポーズ)

区切り (ポーズ) については、NHは長い文の読み方の練習を含めBook3 (p70) のSound Boxで取り上げており、(資料7) Toはこの項目に記述がない。OWではBook2, 3のLet's Review で繰り返し取り上げている。(資料8)

Sound Box

リズム

長い文の読み方—後ろから区切って練習します。

- 1 English is spoken / by more people / than any other language.
 than any other language
 by more people than any other language
 English is spoken / by more people / than any other language.
- 2 English isn't / the only foreign language / we should study.
- 3 We'll have more chances / to talk with people / from other countries.

資料7 New Horizon Book 3 P.70

•)) 文の区切りに注意して、次の文を読みましょう。

- ▶ In those days | many Japanese Americans were farmers.
- ▶ Let's fix the tent, | or it will blow away.

Book 2 P.70

•)) 文の区切りに注意して、次の文を読みましょう。

- ▶ The first thing they saw there | was lots of nature.
- ▶ You use electric rice cookers | to cook rice and keep it warm.

Book 3 P.753

資料8 One World English Course Book 1

2.4 文強勢

2002年からの新指導要領では語強勢と文強勢があわせて1項目になった。日本語は、相対的高低に基づく高さアクセント (Pitch Accent) であるのに対して、英語は強さのアクセント (Stress Accent) が基調になっているので、指導には十分な注意が必要である。To、OWはごくわずかに、黒丸の記号を使って文強勢にふれている。(資料10、11) NHが音調と併せて独自の表記方法を採用し目新しい。(資料9)

Sound Box

リズム 英語のリズムと日本語のリズム

とを比べてみましょう。

はじめまして。

タタタタタ

Nice to meet you.

ター タター タ

母音

[i:] [u:]—なめらかに

[i] [u]—ブツツと切れる感じで

[i:] Green meet [u:] two

[i] fish milk [u] book

資料9 New Horizon English Course

Final Stage



1. 1回目は●の部分に注意して聞き、2回目はあとについて言ってみましょう。

- 1. A: Who is the girl by your brother?
B: That is his friend, Emi. She works in a bookstore.
- 2. A: Tell me about the festival in your town.
B: Okay.



資料10 Total English Book 1 P.75

強弱のリズムに注意しましょう。

▶ morning everyone Canada
 ● ● ● ● ● ● ● ●

▶ Chinese Australia ▶ Nice to meet you.
 ● ● ● ● ● ● ● ● ●

資料11 One World English Course Book1 P.27

まとめ

発音指導の重要性、特に入門期での音声の導入に重きが置かれ始めてからかなりの年月が経ち、分節音素（個々の音）の指導については各社とも工夫を凝らし、フォニックス法の導入などを取り入れ、力を入れた指導ができるようになっていく。

しかしながら、第2章のはじめにも述べたように、英語の音声を考えるときに超文節素の占める役割は文節音素と同程度に、考え方によってはそれ以上に大きい。本論で調査した3社の教科書を見る限りでは、決して十分な記述とはいえない。

その中においては、東京書籍のNew Horizon English Course が独自の方式を取り、先進的な取り組みをしている。現在では、まだ1社のみの試みであり、更に、この教科書を使い始めて2年目ということもあり、定着するにはいたっていないようだが、次回の教科書改定では東京書籍の方式に追随する教科書会社も出て来たり、自社独自の取り組みをする教科書もでてくるのではないだろうか。

教科書を使う現場の教師の立場からすると、3年毎に教科書が変わる現状から見て、一つの教科書のための独自性を持った記述は、その指導に慣れるという意味か

らも、受け入れにくい部分もあると思われる。次回の教科書改訂では、各社とも、新しい学習指導要領にのっとりぜひ、工夫を凝らしよりよいものを作っていくことを願うものである。

引用文献

1. Celce-Muricia, Marianne. *Discourse Analysis and the Teaching of Listening Principle and Practice in Linguistics*, Oxford Univ., 1995 p.366-367
2. 『学習指導要領』外国語 文部省、1998年
3. 畑中 久松『最新英語科教育法』成美堂、1997年 p.139
4. 『学習指導要領』外国語 文部省
5. Komoto, Eugene. *Sound Box in New Horizon "English Phonetics"* Journal of EPSJ, 英語音声学会 1998年 p.137-138
6. 『Total English 内容見本』秀文出版、1996年 p.4
7. 同上 p.5
8. 佐々木輝雄「21世紀に向けての英語教育」『教出ホットライン英語科特集10』教育出版、1997年 p.2
9. 松本茂「入門期におけるリスニング指導」同上書5、1998年 p.2
10. 若林俊輔 手島良「提案 英語のカリキュラム 発音」『英語教育4』大修館、1997年 p.78
11. 畑中 久松『最新英語科教育法』成美堂、1997年 p.19-21
12. 若林俊輔 手島良「提案 英語のカリキュラム 発音」『英語教育4』大修館、1997年 p.78

主要参考文献

Celce-Muricia, Marianne. ed. *Teaching English as a Second or Foreign Language*, 2nd ed. Boston : Heinle and Heinle, 1991

Finocchiaro, Mary. and Christopher Brumfil. *The Functional-Notional Approach from Theory to Practice*. Oxford Univ. Press, 1983

竹林滋『英語のフォニックス』改訂版 ジャパンタイムス、1989年

手島良『すらすら読み書き・英単語』NHK出版、1997年

長谷川潔『英語綴りと字と発音に関する一考察』横浜国立大学ジャーナル 34.

国際経営フォーラムNo.10

1987年

長谷川潔『入門期の英語教育—発音とつづりの同時指導—』日本ブリタニカ、

1980年

米山朝二『新しい英語科教育法』大修館、1983年

使用教科書

教育出版 One World English Course, 1996

秀文出版 Total English, 1996

東京書籍 New Horizon English Course, 1996